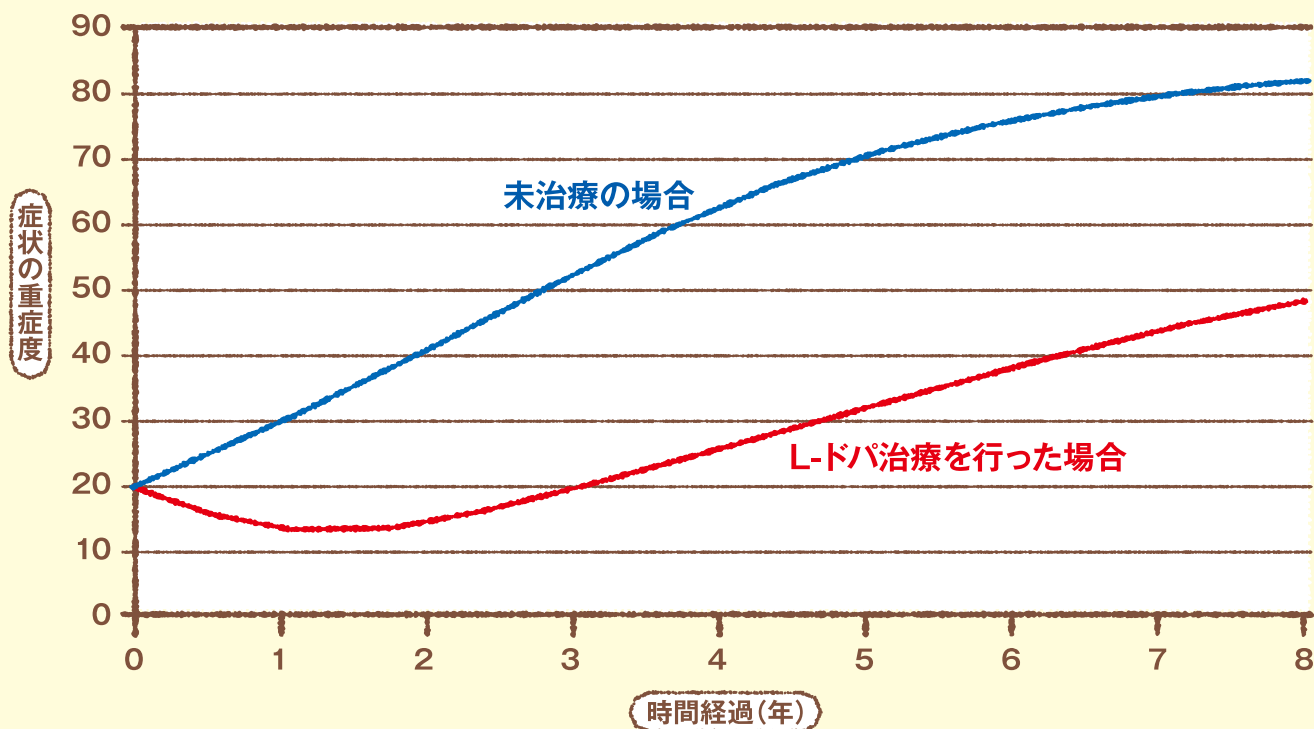


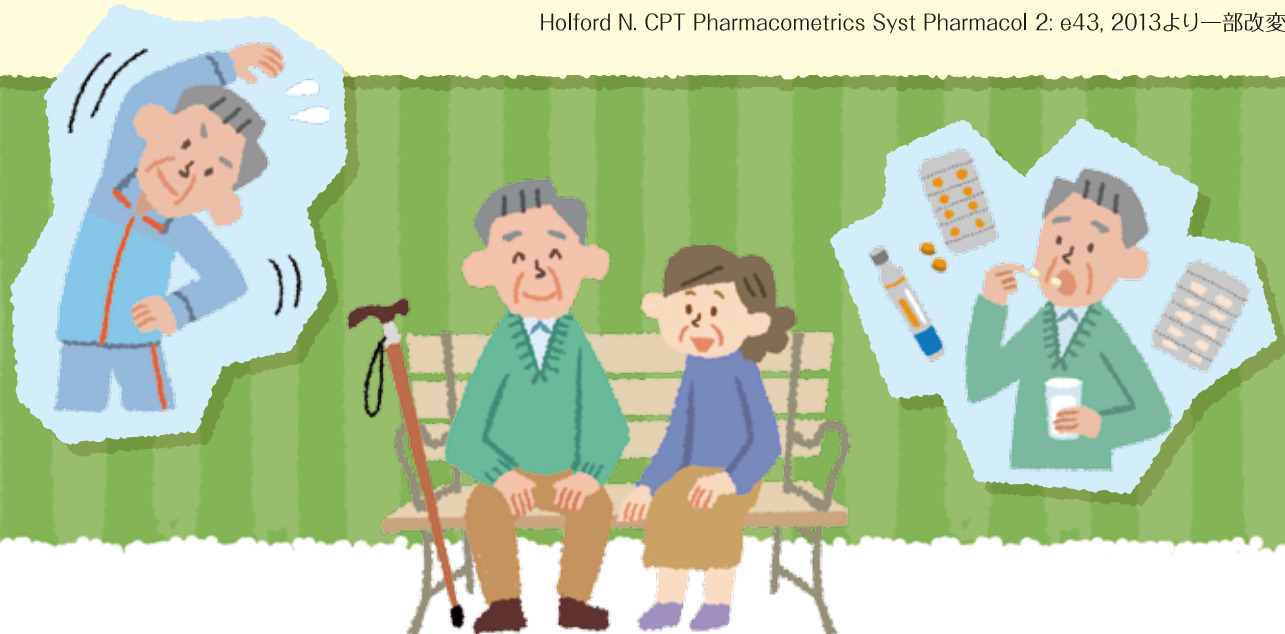
パーキンソン病を治療する目的は、症状を軽減させて生活の質を維持することにあります

現在のパーキンソン病の薬物療法は、残念ながら根本治療ではなく、あくまでも症状を軽減させる対症療法にすぎませんが、薬物療法を行わないと症状は進行していきますので、対症療法としての薬物療法は不可欠です。症状の進行を抑え、日常生活動作および生活の質を維持するためにも、薬物療法をしっかりと行うことが大切です。

パーキンソン病の症状の進行に及ぼす治療の効果



Holford N. CPT Pharmacometrics Syst Pharmacol 2: e43, 2013より一部改変



パーキンソン病の進行と治療経過を理解するために

監修：吉川 由利子 先生 (成田赤十字病院神経内科部長)



パーキンソン病は、手足のふるえ(振戦)、筋肉のこわばり(筋固縮)、動作が遅くなる(動作緩慢)、姿勢が保てない(姿勢反射障害)という4つの特徴的な運動症状を呈する、進行性の病気です。



また、パーキンソン病では、運動症状だけではなく、自律神経症状、睡眠障害、精神症状などのさまざまな非運動症状も現れることがあります。



パーキンソン病の治療には薬物療法や外科治療などがあります。また、適切な運動(リハビリテーション)も大切です。

パーキンソン病は現在のところ治癒が望める病気ではありませんが、**症状を軽減することのできる治療法があります。**

適切な治療により症状を軽減することができれば、生活の質を維持することも可能ですので、**病気の進行と治療経過について正しく理解して、どのような症状が発現する可能性があるか、あらかじめ理解しておくことが大切です。**



パーキンソン病は進行すると、さまざまな症状が現れる可能性があります

パーキンソン病の病初期では振戦, 筋固縮, 動作緩慢の3つの運動症状がみられますが, 振戦と筋固縮は最初は体の片側に現れ, やがて体の両側に現れるようになります。さらに進行すると姿勢反射障害が現れるようになり, 足が地面に張り付いたように動かなくなるすくみ足といった運動症状が現れることもあります。

また, パーキンソン病の非運動症状は運動症状が現れる前からみられるものがあり, 発症後もさまざまな症状が現れることがあります。

一方, 治療(ドパミン補充治療)を長期に行っていると, 症状の日内変動^{注1)}やジスキネジア^{注2)}といった合併症が生じる場合があります, 注意が必要です。

注1) 症状の日内変動: 1日のうちで薬が効く時間が短くなり, 症状の日内変化が激しくなる現象
注2) ジスキネジア: 自分の意思に反して手足や舌が勝手に動く現象

パーキンソン病における運動症状・非運動症状・合併症の経過

